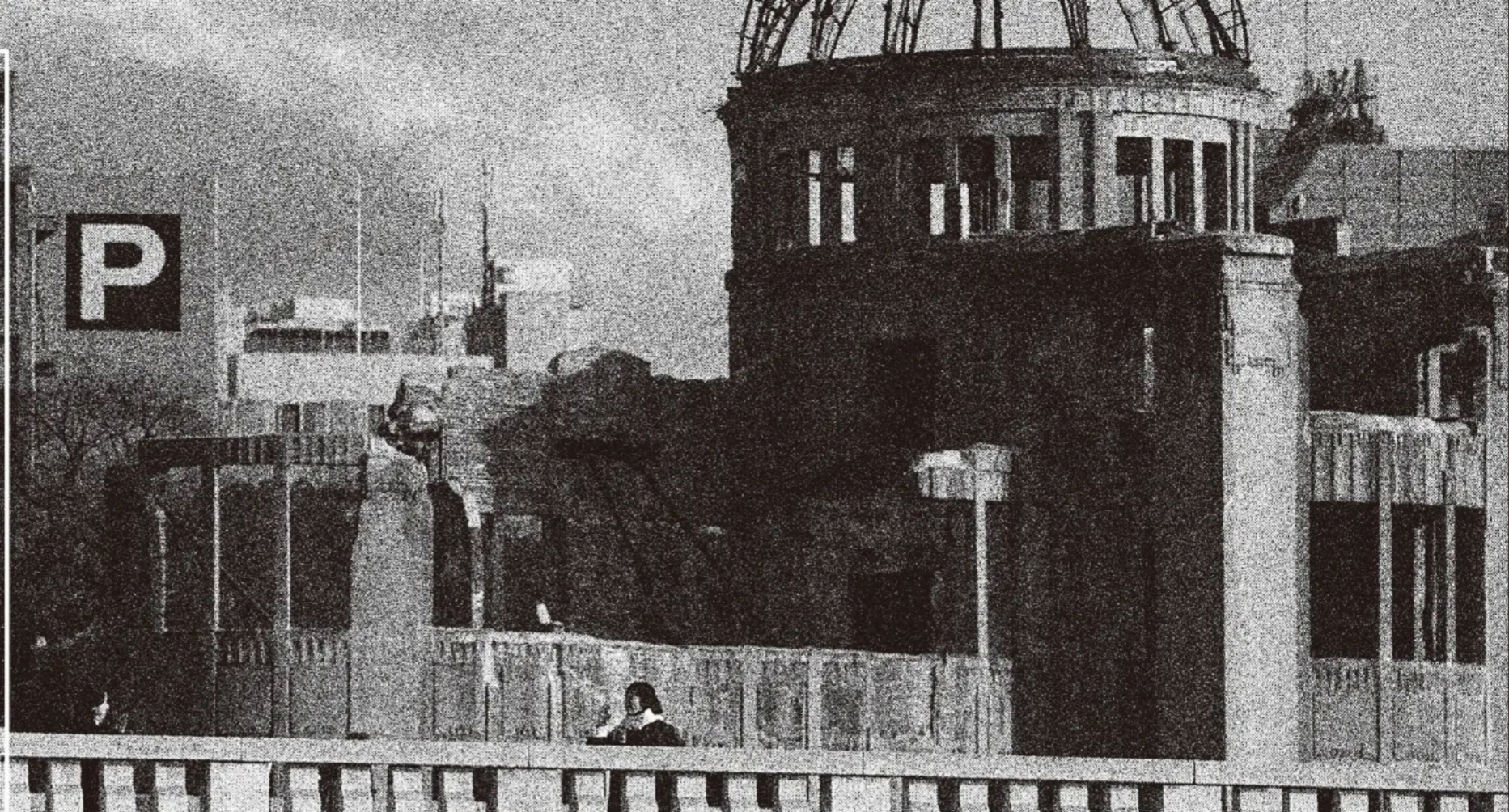


広島を上演する

広島をめぐる4つの出来事



しるしのない窓へ

三間旭浩

ヒロエさんと広島を上演する

山田咲

夢の涯てまで

草野なつか

それがどこであっても

遠藤幹大

【しるしのない窓へ】 出演 | 林 ちる、寺田耀児、吉田 萌 撮影 | 井山永一郎 録音 | 宋 晋瑞 整音 | 重盛康平 【ヒロエさんと広島を上演する】 出演 | 川下ヒロエ 撮影 | 山田 咲 録音・サウンドデザイン | 荒木優光

【夢の涯てまで】 出演 | さいとうよしみ、倉谷 卓、住本尚子 撮影 | 飯岡幸子 音響 | 黄 永昌 【それがどこであっても】 出演 | かのけん、西山真来、生実 慧 撮影 | 高橋 航 録音 | 西垣太郎

演出補 | 倉橋真奈美 制作 | 三宅一平 制作協力 | 森 真理子、吉田雄一郎 製作総指揮 | 松田正隆 企画 | マレビトの会 製作 | 一般社団法人マレビト ©一般社団法人マレビト

広島を上演する

マレビトの会では、これまで「広島」「長崎」「福島」という未曾有の体験を経た都市の過去と現在を複眼的に捉え、演劇作品を制作してきた。今回発表する、映画『広島を上演する』に続き、同タイトルの演劇作品も今後創作する予定である。“被爆都市”として語られる大文字の歴史ではなく、そこに住まう人々の、歴史から零れ落ちる日常の時間を描くことで、広島「いま」を捉え、核の脅威と映像の時代における「ドラマ」と「上演」の新たな可能性を探る。

今回、マレビトの会にプロジェクトメンバーとして劇作家や俳優の立場で参加してきた4人の映画監督が、それぞれ作品を創作する。映画『ユートピアサウンズ』『私は兵器』を監督した三間旭浩、映像作品『庭をめぐる対話』を監督し、北村明子ダンス作品『To Belong』では映像を制作した山田咲、映画『螺旋銀河』『王国(あるいはその家について)』を監督した草野なつか、映画作品『友達』『ジャンスの声』を監督した遠藤幹大。

それぞれが広島に赴いて取材を行い、創作した映画作品を短編集として上映し、多角的に広島の現在を切り取る。現実とドラマ、上演と映画の関係を批判的に捉え直す類例のないプロジェクトが始まる。

『しるしのない窓へ』

広島市内のアパートで生活を共にする真琴と純平。真琴はライターの仕事、純平は服を作る仕事をしてきた。生活の合間を縫って詩を書いていた真琴は、大学生の友人・宇美と、広島のをモチーフに詩を共作し始める。川のように流れ、循環する「窓の中の生活」へ向けて。

監督 | 三間旭浩 / 1985年、京都府生まれ。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科卒業。卒業制作の中編『消え失せる骨』がイメージフォーラムフェスティバルにて優秀賞を受賞。2012年、東京藝術大学大学院映像研究科監督領域を修了。修了制作として初長編作品『ユートピアサウンズ』、2016年に長編第2作『私は兵器』を監督。マレビトの会には『福島を上演する』(2018)で俳優として参加している。

『ヒロエさんと広島を上演する』

広島での原爆投下時に爆心地から約1kmで胎内被曝したヒロエが、自身として、自身の母として、そしてある人生の語り手としてカメラに向かって語る。2022年12月の撮影時に窓の外から見えた広島市街の風景は、「その後」を今日まで生きた彼らの視線と語りによって、幾層にも重なりを成して現れる。

監督 | 山田咲 / 1980年、東京都生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科修了。2008年よりフリーランスの映像作家およびダンスドラマトウルクとして活動。2014年よりマレビトの会に参画。2016年より京都にて国指定文化財庭園の活用・ブランディングを行う。日本造園学会賞、グッドデザイン賞受賞。2022年より再生可能エネルギー事業会社にて広報・ブランディングを担当。2023年に岩手県遠野市に移住。近年の映像作品に『庭をめぐる対話』がある。

『夢の涯てまで』

アーティストのよしみさんは仕事の傍ら、家で絵を描いたり陶芸を作ったりして毎日を過ごしている。大切な存在を喪ったばかりである彼女は、その整理が未だつかないままでの「喪失」とどう向き合い折り合いをつけていか模索をする女性と、彼女を取り巻く人々や出来事を淡々と描いた小品。

監督 | 草野なつか / 1985年、神奈川県大和市出身。東海大学文学部文芸創作学科卒業後、2014年『螺旋銀河』で長編映画監督デビュー。長編監督2作目となる『王国(あるいはその家について)』はロッテルダム国際映画祭、山形国際ドキュメンタリー映画祭などで上映されたほか、英国映画協会が選ぶ「1925～2019年、それぞれの年の優れた日本映画」の2019年で選ばれるなど、期待の俊英として注目を集めている。

『それがどこであっても』

或る劇団が広島についての演劇作品のリハーサルを行っている。その作品で音響スタッフとして参加している難聴の青年が、上演の準備のために東京の郊外にフィールドレコーディングに向かう。さまざまな環境音を記録しながら散策しつづけるうちに、思いもよらない音を聞き取り始める。

監督 | 遠藤幹大 / 1985年、三重県生まれ。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科卒業。2013年、東京藝術大学大学院映像研究科監督領域を修了。同大学院の修了制作として制作した長編映画『友達』(2013年)が国内外の多数の映画祭で上映される。主な映画作品に『ジャンスの声』(2014年)、『燃えさしの時間について』(2017年)がある。



マレビトの会

2003年、代表・松田正隆により演劇カンパニー「マレビトの会」設立。舞台芸術の可能性を模索する集団として、2011年まで京都を拠点に活動。2004年5月に第1回公演『島式振動器官』を上演する。2007年に発表した『cryptograph』では、カイロ・北京・デリーなどを巡演。2009、2010年に広島・長崎をテーマにした「ヒロシマナガサキ」シリーズ(『声紋都市-父への手紙』、『PARK CITY』、『HIROSHIMA-HAPCHEON:二つの都市をめぐる展覧会』)を上演。2012年、東京へ活動拠点を移し、『アンティゴネーへの旅の記録とその上演』を発表。2013年より長崎・福島・広島の三都市をテーマとする長期的な演劇プロジェクト(「上演する」シリーズ)を開始。



特設ウェブサイト



12月9日(土)より
(12月22日まで)

ユーロスペース
EUROSPACE

